

Ⅱ小 学 校 編Ⅱ

主体的に学び続ける児童を育成する
博学連携の在り方いすみ市立夷隅小学校教諭 はしもと ひでまさ
橋本 英正

1 研究主題について

教育基本法第3条に生涯学習の理念に関する条文がある。学校の教育活動全体において、児童が学校では味わえない感動を体験するとともに、博物館等の社会教育施設の役割を理解し、主体的に活用していこうとする態度や能力を身に付けさせ、生涯学習のための力の素地を養っていくことが求められている。

本研究では、県立中央博物館分館海の博物館（以下海の博物館）と連携して、実践を行う。単元は、第5学年理科「生命のつながり メダカのたんじょう」とし、海の小さな生物の理解から海や海の生き物へと興味・関心をつなげ、日常生活及び、生き物全般、他教科へと学びを広げていきたい。指導に当たっては、児童の主体的な学びにつながる手立てを、指導計画に効果的に位置づけながら学習を進め、児童に博物館を活用した学びの有用性を実感させたいと考えた。

海の博物館との連携を基に、生涯学習へとつながっていく、「主体的に学び続ける児童を育成する博学連携の在り方」を探っていきたいと考え、本主題を設定した。

2 研究目標

小学校理科において、主体的に学び続ける児童を育成するためには、学校と博物館がどのように連携すればいいのか、博学連携の在り方を考え、その有効性を明らかにする。

3 研究の実際

(1)児童の主体的な学びについて

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」として、問題解決的な学習を積み重ねていくことで、新しい時代に対応できる「資質・能力」を育んでいこうとしている（表1）。

表1 中教審答申「主体的な学び」とは

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動をふり返って次につなげる学び。

(2)博物館と連携して、学習プログラムと指導計画を作成する。

①学校と博物館の要望・声から

学校・博物館への調査によると、博学連携について、それぞれの以下の要望・課題が挙げられた。

学校

- ・活用プランの提示があるとよい
- ・教科書（学習指導要領）との関連
- ・交通手段の確保が難しい

博物館

- ・ねらいをはっきりとしてほしい
- ・いい雰囲気をつくってほしい
- ・継続的な関係づくり
- ・展示室活動の開発

表2は、新学習指導要領解説、総合的な学習の時間編第5節「外部との連携の構築」からの抜粋である。学校と博物館の打ち合わせが不足した場合、以下に書かれているような事態が生じる可能性が考えられる。

表2 外部との連携の構築(下線は筆者が加筆)

外部から講師を招く際に、例えば、講話内容を任せきりにしてしまうことで、児童が自分で学び取る余地がないほど詳細に教えてもらうことになってしまったり、内容が難し過ぎて児童が理解できなくなってしまうたりする場合も見られる。外部講師に依存し過ぎることなく、児童の学習状況に応じて教師が指導するなど、学習活動を構成する責任者としての役割を果たさなくてはならない。

課題の解決と関連して、児童と教職員は博物館の学びのおもしろさを味わい、研究員は協力への手応え・やりがいを感じることができ学習活動を展開する学習プログラムの必要性を感じた。

②児童が主体的に取り組む学習プログラムの作成の流れ

表3 単元の構成

時	主な学習活動と内容
1	〇海にも、目には見えない小さな生物がいるのだろうか。 〇海についてのイメージを友達と話し合っ共通点やちがいを見つけよう。
2	〇海には、どのような生き物がいるのだろうか。
3	学習プログラム1「海のマクロツアー！」
4	学習プログラム2「展示室調査隊！」
5	〇夏休みに海や博物館を、もっと身近に感じてみよう！
6	〇海の生き物は、実際にどのように生きて生きているのだろうか。
7	〇海の生き物は、実際にどのように生きて生きているのだろうか。(観察)
8	
9	〇海の生き物についてまとめよう。

本研究では2つの学習プログラムを作成し、指導計画の3・4時間目に位置づけた(表3)。1つ目の「海のマクロツアー！」は、海の小さな生物の観察プログラムである。D社の理科の教科書では、海の小さな生物を調査する学習活動が扱われている。この活動に、海の博物館を活用してみたいという近隣小学校の声も考慮した。2つ目の「展示室調査隊！」はワークシートによる展示室を活用した学習プログラムである(図1)。自ら気づき主体的に活動に取り組み、博物館



図1 「展示室調査隊！」ワークシート

の学びのおもしろさを味わう本研究が目指す学びと、展示室を採検できる新たなワークシートの必要性を感じていた博物館の願いの実現を図った。

両プログラムともに、児童が博物館での学びの有用性をより感じられるように、「帰ってすぐ家族に話したくなる話や、次にそのような場面になったら思い出さずにはいられない話などは、参加者の変容につながる無形のお土産」(木下周一・横山千晶『博物館教育論-新しい博物館教育を描きだす-』ぎょうせい 2012年)となる知識・技能の習得を、研究員の経験を生かしたり、他博物館のプログラムを参考にしたりして意図的に位置づけた。

指導形態は、ティームティーチングで行い、それぞれの専門性を生かした学習プログラムの展開を目指した。

指導計画の作成からプログラムの開発や実際の授業へ向けての準備などを、研究員と連携して決めていくことで、児童の授業を共に良いものにするという思いが大きくなっていった。

(3)検証授業の分析と考察

①主体的な学習プログラムであったか

特に今回学習プログラムを作成した第3・4時の博物館での活動では、2つの学習プログラムについては研究員や展示物との対話を通して課題を解決しようとする、児童の主体的な活動が見られた。児童の記述(図2)からは、ワークシートを活用した活動を通して生き物の見方が養われ、海の生き物の多様さに気付くことができ、海に親しみをもつようになった様子がうかがえる。

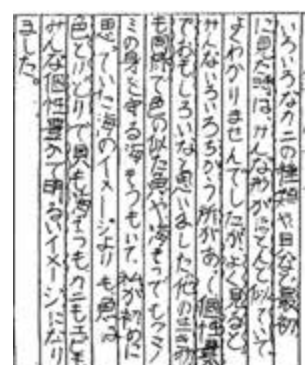


図2 海のイメージに変容が見られた記述

②博物館での学びの有用性を実感し博物館を活用したいという主体的な態度が育ったか

②博物館での学びの有用性を実感し博物館を活用したいという主体的な態度が育ったか

図3は「博物館とはどんなところか。」「博物館の人の仕事は何だと思うか。」と児童に質問した結果である。事前では「博物館は古いものや珍しいものが飾ってある。」や「展示物がずれていたら直す。」など自らの学びと関係づけが弱い回答が多かった。事後では、それぞれ、「疑問をもてる。」「友達と話し合い考えられる。」や「わかりやすく教えてくれる。」「サポートをしてくれる。」との変容が見られた(図4)。

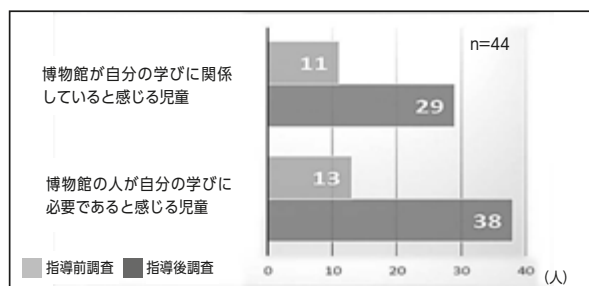


図3 博物館での学びの有用性

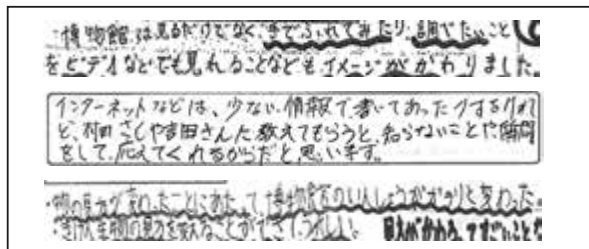


図4 博物館での学びを見童がどのように捉えたか

今後理科や社会科で95%の児童が博物館での学習を行いたいと回答した。博物館と連携し作成した2つの学習プログラムが、博物館の学びの有用性を実感する上で効果的であったといえる。

③博物館での学びの有用性を実感した A 児の変容（図 5）

学習を進めるごとに興味・関心に変化が見られ、友達の考えに触れたり、友達と美術館に出向いたりする行動を通して、意欲が高まった様子が見て取れる。9月の磯観察では、より積極的な態度が見られている。友達の存在や研究員の支援が、A 児の主体

的な活動につながった。

小学校での博物館活用の成功体験には、友達や家族の存在が良く関係していると言える。

学習前	博物館の役割＝さっぱり思いつかぬ 博物館の方の仕事＝物の並べのゴミをとっている		友達
1	知っているけど・・・本当にいかに確かめてみたい みんなの考えがすごかったの。びっくり		
2	すごいらこうだな いっぱいおきたい		
3	いろいろあってすごかった場所！		
4	夏の自由研究 西洋美術館		
5	アルチンボルト展 →作品を制作		
6	家庭		
7	多様な生き物 磯は奥が深い！		
8	浅い潮だまり等には小さい生物＝気付き		
9	研究員との積極的なコミュニケーション		研究員

図5 A児の変容

④博物館との関係の進展・連携強化

博物館職員研修会において、本研究の中間発表ならびに、現在の小学校での学習カリキュラムについて紹介を行った。発表後、今後の学校との連携についてどのように進めていくかについて意見交換を行った。今回作成した学習プログラム及びワークシートを核とした、学校と博物館の新しい連携の在り方にもつながるように、さらに改善を行い、形として確立させるとの共通理解が図れた。

4 研究のまとめ（成果と課題）

(1)成果

①研究員とねらいを共有して教材研究を行うことで、博物館がもつ資料や情報を生かし、海や海の生き物について、児童の興味・関心を高めることができ、主体的な学習活動が展開できた。

②学校と博物館双方が指導計画に「主体的な学びの過程」を意識した活動を明確に位置づけて実践を行うことで、児童が博物館での学びの有用性を実感することができた。

(2)課題

ワークシート等の改善とともに、作成した学習プログラムを普及させていくために、博物館とどのように連携を継続していくかについて検討し、具体的な計画づくりを行う必要がある

中学校編

感性や創造性を豊かに育む美術科指導における言葉の効果に関する研究 ～思考ツールを活用したイメージの鮮明化～

柏市立光ヶ丘中学校教諭
(前柏市立柏第五中学校教諭) あべ けんいち 阿部 健一



1 研究主題について

新学習指導要領が公示され、育成すべき資質・能力について、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」として整理された。これらの資質・能力について、美術科の見方・考え方から、日常生活において意味や価値が固定化・概念化されている様々な事象を、自分の感じ方を基にして思考・判断し、既存のものとは違った可能性や価値の創造を実践的に経験することと考えた。また、対話的な学びの観点から、表現する「個人」と、その表現を受け止める「他者」との関係を考えると、互いの表現の違いから感じ方・考え方の多様性に触れ、一人では発見しえない価値を共有し合える可能性が見出せる。

これまで、社会や身近な生活と関わりのあるテーマから、自分が感じる事や立場・願いなどを考え作品化し、それを鑑賞資料として相互に発表・意見交換させる題材を開発・実践してきた。しかし、互いの作品を用いた発表・意見交換の場面で、自分の作品の意図や想いを十分に伝えられなかったり、発表を聴く側の生徒も、表面的な解釈で終わってしまったりする場面がしばしば見られた。これは、発表をする側・発表を聴く側共にイメージを鮮明にできていないことが原因なのではないかと考えた。

そこで本研究では、鑑賞時の作品解釈と制作時の発想・構想の場面に言葉を介入させ、イメージを鮮明にさせたり、制作意図を明確にさせたりする効果を検証する。鑑賞では、対象から感じる曖昧なイメージを多角的・多面的な視点で言葉にして分析し、

再度関係付ける活動を行えば、対象から感じた事に、自分なりの根拠を持った意味付けや価値付けができ、イメージを鮮明にさせることができると考えた。また、制作でも、テーマや材料のイメージを言葉で分析して考えることで、主題が整理され、その過程で新たな発見や新しいイメージの生成も生じながら、明確な意図を持った構想を練ることができると考えた。そして、互いの作品を鑑賞し合う場面では、互いが感じたことを言葉で伝え合い、一人では気づけなかった価値の発見・共有につながれると考えた。言語活動の充実は、現行学習指導要領解説にも示されているが、美術で言葉を扱う難しさも以前から指摘され、有効な先行研究も少ない。感性的に受け止める事の難しさと概念としての言葉の関係を整理し、豊かな学びの創造を目指し、本主題を設定した。

2 研究目標

対象から感じたイメージを鮮明にして伝え合うことに、言葉はどのように影響し、また、美術科においては、表現・鑑賞の場面に、どのような言葉の活用が効果的であるのかを実践を通して検証する。

3 研究の実際

(1)研究仮説

思考ツール（鑑賞ではYチャート、発想・構想ではイメージマップ）を活用し、鑑賞では作品の構成要素やタイトル、制作ではテーマや材料を構成する要素を多くの短い言葉に置き換え、つながりを見出し、再

度統合する活動を行えば、生徒は独創的に作品の解釈を生み出し感じ方を深め合ったり、意図を明確にして自信をもって作品化できるだろう。

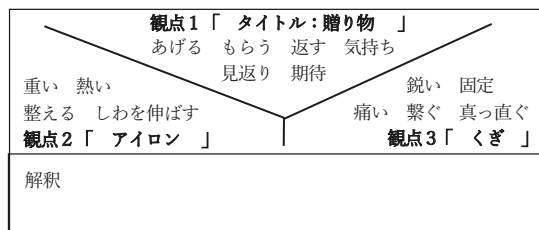


図1 Yチャート 活用例

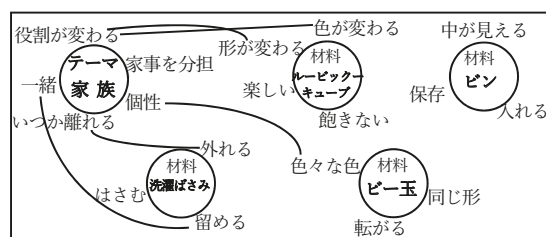


図2 イメージマップ 活用例

(2) 検証授業の実施・分析・考察

導入時にマン・レイの作品で鑑賞①②、単元の最後に、完成した互いの作品を用いて鑑賞③を行った。言葉を活用して自分が感じたことの根拠を見出し、自分なりの解釈を生み出し感じ方を深めることをねらいとした。

- A⁺…各観点から見つけた言葉の意味を総合的に関係づけた解釈
 A…各観点から見つけた言葉を使った解釈
 B⁺…いくつかの観点から見つけた言葉を使った解釈
 B…観点から見つけた言葉と関連付けられず全体印象のみで表面的
 C…解釈ができない、無記入

図3 鑑賞①②③の評価基準

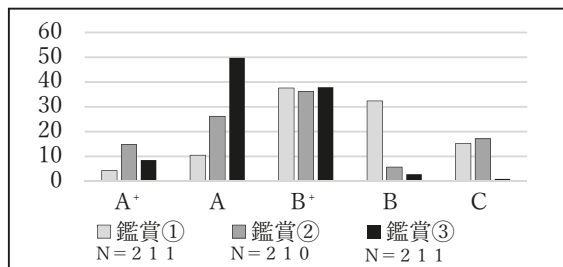


図4 鑑賞の深まりを図3の基準で評価した鑑賞①②③の比較

①【鑑賞①②の分析・考察】

鑑賞の深まりを図3の基準で評価し、比

較した図4から、鑑賞①では、B評価が多数を占めた。原因は、視覚情報から感じることを言葉にできない生徒が多数いた事である。鑑賞②では、言葉を全体で共有してから解釈させたことで、多くの生徒の評価がB⁺以上に向上し感じ方を深められた。生徒は言葉のある程度用意できれば、意味をつないで独創的に解釈を生み出せると考える。また、言葉の扱いに慣れていた生徒も、他者の視点からの言葉を活用し、より深みのある解釈ができた。他者の視点からの多様な言葉を共有することは、読み取れるイメージを深めることに有効であると考えられる。

②【発想・構想】

- A⁺…テーマと材料のつながりに独創性や深み、多層性が見られる。
 A…テーマと材料のつながりに独創性や微妙な差異を感じ取った選択が見られる。
 B⁺…テーマと材料の機能や特性をつなげている。
 B…テーマと材料のつながりが不鮮明。
 C…未記入 ※欠席等で未記入の生徒については言葉の関係や影響が読み取れないため検証対象からは外した。

図5 構想の評価基準

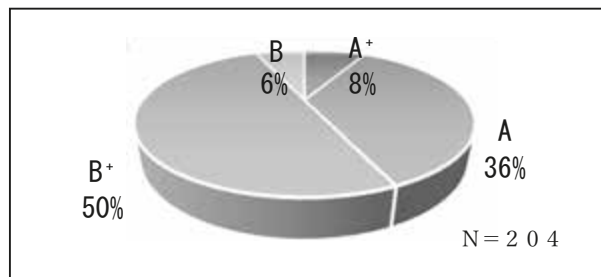


図6 構想の評価 評価別割合

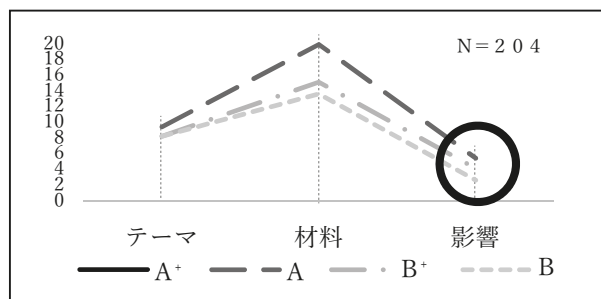


図7 評価別 項目ごとの言葉の数 平均値

図6から、構想の評価はB⁺以上が多数を占めた。また、図7から、構想の評価A⁺～Bそれぞれの生徒のイメージマップに書か

れた言葉の総数の平均が、高い評価から順に階層を形成していた。構想の評価 $A^+ \sim B$ 間には、テーマと材料に関する言葉の総数は平均で約 10 語の差があった。多くの短い言葉で分析的に考え発想を展開することは、テーマを深め、表現の可能性を広げることに効果的と考える。「影響のある言葉」の数にも $A^+ \sim B$ の生徒間には、平均約 5 語の差が生じた。「影響のある言葉」とは、イメージマップに書かれた、テーマや材料に関する全ての言葉から、最終的な構想に影響を与えたと考えられる言葉を教師が抜粋したものである。 $A^+ \cdot A$ 評価のような、「影響のある言葉」が多い生徒は、表現の強弱や方向、安定感等の関係を吟味し、意図が反映された材料を選び、独創的にイメージし構想を練れた。「影響のある言葉」を見つけ、意識の中で統合することは、独創的なイメージを生み出すことに効果的と考える。

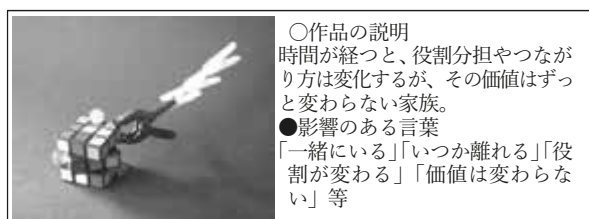


図8 「家族」をテーマとした生徒の作品・影響のある言葉

③【鑑賞③の分析・考察】

図4から、 A^+ 評価は減少した。鑑賞①②ではアーティストの洗練された作品を鑑賞したが、鑑賞③では、構成力が十分に身に付いているとは言えない生徒同士の作品を鑑賞し合った。このため、鑑賞③では作品を読み解く難易度が高まった事が原因と考える。しかし、 $B \cdot C$ 評価は、ほぼなくなり、全体の鑑賞力は底上げされた。発想・構想で多くの言葉に触れ、言葉の意味をつないでイメージを生み出す活動は、鑑賞時に生徒が自力で楽しみながら、解釈が難しい作品を鑑賞し合い、感じたことを言葉にして交流し合う力を付けることに効果があったと考える。

④【意識の変容】

図9より、事前調査では、本研究のキーとなる「言葉についてよく考える」は、65%だった。授業では、曖昧な感覚を言葉で鮮明にし、異なるもの同士につながりを見つけ、独創的にイメージを生み出す活動に多くの時間を使った。生徒には、全体の印象から受けるイメージは、過剰な情報が関係し合いぼやけていること。それを構成要素に分け言葉で分析し、再度統合することで、イメージは鮮明になることを、言葉の重要性・感じ方・考え方の関係として指導した。

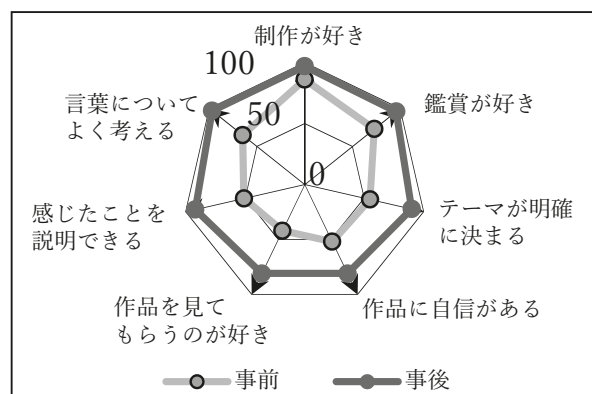


図9 事前・事後意識調査の変化

調査では、「言葉についてよく考える」は97%と最も高い数値に達した。他の項目も80%以上に向上した。言葉は、制作においては自分の意図を明確にさせ、鑑賞においては感じたことを鮮明にし、自信をもって互いの感じ方・考え方を伝え合い多様な価値を発見し合うことに有効であると考えられる。

4 研究のまとめ（成果・課題）

(1)成果

対象を言葉で分析・統合することで、鑑賞では独創的な解釈を生み出し感じ方を深め、発想・構想では、作品の制作意図を明確にして自信を持って表現できた。

(2)課題

様々な題材で繰り返し取り組み、扱える言葉を増やせるように授業改善を行う。

■ 高等学校編 ■

高等学校につながる中学校歴史学習における歴史的思考力育成の試み ～ツールミンモデルを用いた思考過程の可視化～

県立木更津高等学校教諭 まつもと たかお
(前県立千葉中学校・高等学校教諭) 松本 隆夫



1 研究主題について

新学習指導要領により、小学校から高等学校まで、学校種を越えた教科等の目標や内容が明示され、さらに高校卒業までに「何ができるようになるか」「どのような児童・生徒を育てるのか」を明確に示さなければならなくなった。また、学力の重要な三つの要素を「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」とし、このことから学力とは、継続的に学び続ける力であると考えられる。また、この三つを獲得させるための支援方法の研究が、授業改善につながると言える。中学校社会科・地理歴史科・公民科においては「社会的な見方・考え方」を身に付け、複雑化した現実の社会に見られる様々な課題解決の場面に、必要な価値判断力や意思決定力を発揮することが課題である。そのためには、授業の中で「問い」を工夫し、多くの「課題解決場面」すなわち「価値判断場面」や「意志決定場面」を設け、対話を繰り返すことで思考力・判断力・表現力が育まれると考える。さらに、「思考過程の可視化」を取り入れ、意見交換を活発にし、討論を試みる。このような学習活動を設定すれば歴史的思考力の育成が図れるであろうと考え、本主題を設定した。

2 研究目標

中学校歴史学習において、思考を揺さぶ

るための適切な「課題解決場面」と「問い」を設け、思考過程を可視化すれば、明示された論点を他者と共有し意欲的に検討することができ、歴史的思考力が育成されることを明らかにする。

3 研究の実際

(1)研究仮説

中学校歴史学習において、適切な課題解決場面を設け、ツールミンモデルで思考過程の可視化を図れば、明示された論点を他者と共有し検討を重ね、解決に向かおうとする意欲が高まり、歴史的思考力が育成されるであろう。

(2)研究の具体的な内容

①歴史的思考力の定義

本研究では先行研究をふまえ、歴史的思考力を「過去の社会的事象に関して、諸資料を読み取り、因果関係や変化を、論理的に考察・解釈し、新たな課題を見つけ解決に向かおうとする力」と定義する。

②ツールミンモデル＝思考過程の可視化

ツールミンモデルとは、根拠・理由・主張・裏付け・反証・限定詞からなる議論モデルで、これを学習活動に取り入れれば、思考過程が可視化され、自己の主張の正当性を示すことができる。また、その「根拠のある理由」を他者に説明することによりより多面的・多角的な見方や考え方が育まれることが想定される。

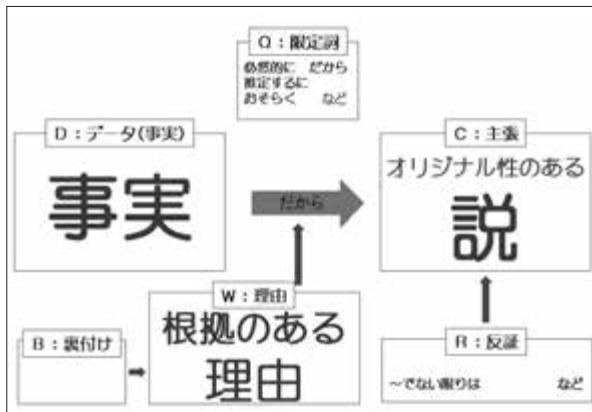


図1 トゥールミンモデル

③「課題解決場面」の設定

新学習指導要領解説の「改定の要点」から以下の3点について注目する。

(ア)「各時代を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現する学習」を明示

(イ)「歴史に関わる個別的な事象同士の関係」の明確化

(ウ)「我が国の歴史に間接的な影響を与えた世界の歴史について」の充実

これを踏まえ、課題解決場面として次の4点に焦点を当てて、授業を構成した。

- ・「ポルトガル人は、1543年以降どのような目的で日本にやってきたのか。」
- ・「狩野内膳の『南蛮屏風』からどのような貿易の様子を読み取ることができるのか。」
- ・「鎖国下の江戸幕府が、オランダから得た最も重要なものは何か。」
- ・「国内の金銀産出量減少に対し、幕政担当者としてどう対処すべきか」

これらは、時代を大観する課題であり、個別的な事象同士を組み合わせ考察しなければ、多面的・多角的な理解は困難である。また、外交や貿易を主題に置く以上、日本だけの問題ではなく、相手国との関係も深く関わっている。以上のことから「課題解決」のためには、教科書記述の周辺や

写真や図版など諸資料を組み合わせただけでは、不十分であり、正しい歴史認識を獲得することはできない。課題解決のためには、生徒はより広範囲に教科書の記述を点検し、与えられたいくつかの情報やデータの関連性を吟味することにより、思考を巡らせ、深めなければならないことになる。

表1 授業における主発問と下位発問

	授業内容と発問 (MQ=主発問 SQ=下位発問)	活用した主な 史料
第1時	授業名「ヨーロッパとの出会い ～船と生糸の貿易～」 SQ①「次の学習漫画の中で、ポルトガル人が乗っていた船はこの国の船か？」 MQ「1543年以降、ポルトガル人はどんな目的やメリットがあり、日本にやってきたのか？ポルトガル人の立場に立って考えよう。まとめ方は○×説という形で、説得力があり、オリジナリティのある理由を考えてみよう」 SQ②「新資料A～Hをもとに説を再検討し、その説を成り立たせる根拠を探してみよう？」	・学習漫画～鉄炮伝来 ・『鉄炮記』南蛮文之 ・『日本一鑑』 ・『幕政府志』 ・『石見銀山』 ・『宣教師の書翰』 ・『日本島国』 (ティセウ版)
第2時	授業名「南蛮貿易の実態～仲介貿易としての南蛮貿易～」 SQ①「ポルトガル来航ではもたらされたものは何か？(有形・無形)」 MQ「歴史学者の立場で考えよう。狩野内膳の『南蛮図屏風』は南蛮貿易を説明する上で不足しているものがあると考えられるそれは何か。歴史学者として南蛮貿易のどの部分を後世に伝えたいのか？」 SQ②「なぜ、日本は生糸を中国(明)から直接入手することができなかったのか？」	・狩野内膳～南蛮屏風 ・『南蛮屏風』 (三の丸尚蔵館蔵) ・インド文書館蔵の資料
第3時	授業名「オランダ・清国との交流 ～生糸か情報か～」 SQ①「対日貿易で結果的にポルトガルが去りオランダが残った理由を資料集の図版から探してみよう。」 SQ②「ポルトガルとの貿易をやめてしまった場合、起こり得る問題を考えてみよう。」 MQ「オランダの立場に立って考えよう。清(中国)との貿易が開始された(生糸の直接輸入が可能となった)のに、オランダはどんな手段を使って日本との貿易を継続したのか考えてみよう。」	・「原城の戦いを考え直す」 ・「学校では習わない江戸時代」 ・体系 対外交渉史 ・円山応挙「長崎港之図」 ・「江戸幕府日記」
第4時	授業名「江戸後期の貿易プランを考えよう」 SQ「生糸は江戸時代を通じて重要な輸出品であり続けたらどう？」 MQ「江戸後半は『新たな輸出品を見出していくか』あるいは『貿易を縮小していくべきか』。将軍や老中の立場になったつもりで考えてみよう。」	・「富岡製糸場」図 ・山川日本史用語辞典 ・かみこやしない草 ・コンブラ版 ・ディドリ百科全書 ・伊万里焼 ・日本漆器

④検証授業における仮説の分析方法

検証授業は、課題解決場面を主発問として提示し、史資料を提示し、班単位（4名）でトゥールミンモデルを作成し、各班の主張をホワイトボードで示し、討論授業とした。全体像は、図2のように構成した。

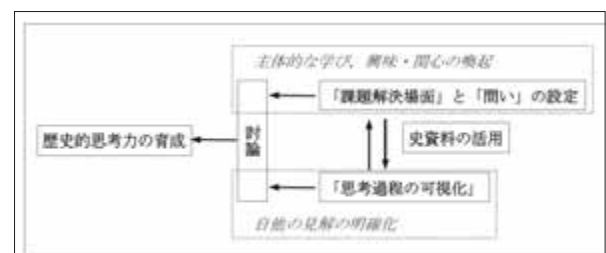


図2 検証授業の構成

「歴史的思考力育成」の評価については、各時のワークシート、振り返りシートの自由記述欄等に着目し、その質的な面での評価規準を設け、これに基づき分析を行った。

表2 検証授業における評価規準

レベル0	…各時の学習課題について、TMの3種のポイント（データ・理由・主張）のいずれかが欠けていて未完成である。
レベル1	…各時の学習課題について、TMの3種のポイント（データ・理由・主張）が欠けることなく記述され、主旨が通っている。
レベル2	…各時の学習課題について、TMにまとめたもの、討論を通して、補強や修正ができています。また、ワークシートにその理由も明記されている。
レベル3	…レベル2までを満たし、さらに各シートの自由記述欄等に新たな課題の発見記述や、見つけようとする姿勢の記述が見られる。

※TM（トゥールミンモデル）

表3 歴史的思考力の育成の評価状況

レベル	内 容	第1時	第2時	第3時	第4時
レベル3	学習課題について、トゥールミンモデルで自己の主張を論理的に考察・整理したのち新たな課題を見つけたことができた。	19.5%	18.2%	24.6%	35.6%
レベル2	学習課題について、トゥールミンモデルで自己の思考過程を表現し、かつモデルの修正や補強ができた。	50.6%	40.9%	49.2%	42.4%
レベル1	学習課題について、トゥールミンモデルで自己の思考過程を表現することができた。	18.2%	9.1%	7.7%	8.5%
レベル0	学習課題について、トゥールミンモデルで思考過程を表現することができなかった。	11.7%	31.8%	18.5%	13.6%
各時々の平均を算出。レベル3＝3点、レベル1を1点、レベル0を0点とし合計値を表示。（最高値3.0～最低値0.0）		1.78	1.45	1.80	2.00

表4 新たな課題発見の生徒記述（抜粋）

・ポルトガルとオランダの貿易面の違いについて資料に基づいて自分たちで説を立てていきたい。 ・現在この屏風の舞台・描かれた場所は特定されているのか。この屏風が描かれたときに既にキリシタン大名がいたのか？キリシタン大名は貿易するために来た大名もいたということなので、一人ぐらい視察や取引に来てもおかしくないと思ったが…。 ・オランダと日本(幕府)の関係は対等だったのだろうか？日本が制限をかけるという事は日本の立場が上なのだろうか。 ・なぜ、地方の特産品が発展したのか知りたい。伊万里焼だけが西欧に対応していったのか

トゥールミンモデルにより可視化された思考過程が、討論により新たな思考を導き出せるようになり、その結果、新たな認識や課題を持つことができるようになると考えた。検証授業による歴史的思考力育成の評価は、定義に基づき表2の規準を用い、各時の取組と到達度を数値化した（表3）。

この結果として、レベル3の割合は増加し、『新たな課題を見つけ解決に向かおうとする力』と解釈できる記述（表4）から、多くの生徒（19.5%→35.6%）が、歴史的思考力を育成することができたと考える。しかし、その一方、レベル0については顕著な減少が見られず、1回目と4回目を比

較し、大きな変化はなかった。

4 研究のまとめ

(1)成果

「課題解決場面の設定」と「史資料の効果的提示」の二つをつなぐ発問の工夫により、学習意欲や関心を高め、思考に揺さぶりをかけることができた。また、トゥールミンモデルを用いることで思考過程が可視化され、生徒が具体的かつ筋の通った主張をつくる姿勢を身に付け、歴史的思考力育成に役立ったと考えられる。なおこのモデルの活用は、歴史的論争問題やその場面で有効であり中学段階での思考の揺さぶりは、歴史学習を高等学校につなげる意味でも重要であると考ええる。

○トゥールミンモデルの活用により、以下のことが可視化できた。

- ・何が原因でトゥールミンモデルに変容・強化が起こったのか確認できる。
- ・どのようにトゥールミンモデルが変容・強化したのか確認できる。

○また、活用によって以下のことが導かれた。

- ・「論点が明示」されたことにより、主張等が細部にわたり検討されることになった。
- ・この結果、「討論参加の意欲向上」が見られ、より多くの生徒が主体的に授業に参加することができた。

(2)課題

教科書の記述を基点として、客観的資料を発掘・活用し、歴史的論争問題や場面等でのトゥールミンモデル活用法の研究が、歴史的思考力育成において必要であると考ええる。生徒からの聞き取り調査の結果から、より高次元の歴史的思考力育成のため思考過程の可視化を含めどのような工夫が適切であるのか、研究を進めていく必要がある。